
想い、届いて.....。

エイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想い、届いて……。

【Nコード】

N6758U

【作者名】

エイジ

【あらすじ】

唯の提案で始まった七夕パーティー。

皆が短冊に込めた願いとは？

そして皆の想いが、ある出来事を呼び起こす。

これは「けいおん〜ピュアガールズ〜」の面々が織り成す、短編小説です。

(前書き)

こんばんは、エイジです。

今日は七夕という事で、急遽思い付いた小説を書き上げました。

勢いだけで進めてる感は否めませんが、特別な日の暇つぶしになれば幸いです。

それではどうぞ、御覧下さい。

年に一度しか許されない、対岸にいる想い人との出会い。

そんな貴重な日が何故、こんな梅雨の真っ最中に設定されているのか分からない……。

これじゃあ、天の川なんて拝めないよお……。

）
）

「今日は梅雨前線が日本列島から南下しますが、湿った空気が流れ込んでくる影響で、曇り空のハッキリしない天気となる所が多いでしょう」

朝の情報番組内の天気予報で、笹の葉を背にお天気お姉さんがそんな事を言ってたなあ……。

夕方から夜に差し掛かるうとして今でも、雨は一向に降らないけれど晴れもしない……。

そんなどっちつかずの、どんよりとした低い雲が立ち込めていた……。

き進めている様子。

ムギちゃんや澁ちゃん、海衣奈ちゃんも続けて書き始めた。

私だけだよお、まだ書いてないの……。

焦りを感じる中で、私はふと思った。

今、感じるままの事を書いてみよう……。

そういう考えに辿り着いた時、ふでペンは自然と文字を書き連ねていた……。

「皆、書き終わったみたいだな。それじゃあ、一人ずつ笹の葉に飾り付けていこうぜ」

「それじゃあ、言い出しっぺの律から行こうか？」

「へ？アタシから!？」

「まかりなりにも軽音部の部長なんだから、まずは部長がお手本として先陣を切るべきだろ？」

『澪ちゃんの言う通りね。さあ、律ちゃんからどうぞ』

「お前ら、そういう時だけアタシを部長扱いするのな……。まあ、いつか」

観念した律ちゃん部長は、手にした短冊を早速笹の葉に括り付けた。

いやがおうでも、皆の視線が短冊に集まってくる。

書いてあった願い事は……。

“新品のドラムセットを誰かください 律”

「……律、こんなの自分でどうにかしろ……」

澪ちゃんはただ呆れ返ってた……。

他の皆も苦笑してた……。

「いいじゃんかさあ！！願い事なんて、中々叶わない事を書くもんだろ？じゃあ、そういう澪は何お願いしたんだ？」

「え！？わ、私は……」

「隠してないで見せろ……！とりゃっ……！」

「あつ、何するんだよ、律う……………」

漣ちゃんがかたくなに持っていた短冊は、呆気なく律ちゃんに奪われた……………。

皆の興味が一斉に短冊に注がれる。

漣ちゃんの願い事は……………。

“ 恥ずかしがり屋と怖がりが出りますように 漣 ”

「……………これこそ漣が頑張らないと、どうしようもないだろ?」

「……………私自身じゃどうにもならないから、こうしてお願いしてるんじゃないか……………」

「まあまあ、いいじゃない。これも立派な願い事だもん」

「ムギは何お願いしたんだ?」

「私?私はこれよ」

ムギちゃんが差し出した短冊に書かれていた願い事は……………。

“普通の暮らしがしたい　　ムギ”

「……………ムギの言う普通ってどんなレベルなんだ？」

「そうねえ……………。四畳半の古いアパートで、アルバイトをしながら一人暮らしするの。晩御飯は御飯にお味噌汁、焼き魚に沢庵が理想的ね」

「……………」 ……想像がつかない……………」

お嬢様のアパート一人暮らしなんて、なんだか現実味が沸かない……………。

それに、それじゃあ普通を通り越して、かなりの貧乏生活だよ……………。

「それじゃあ、次は私、私」

「おお！！唯、結構積極的だな……………」

手を挙げて颯爽と短冊を括り付ける唯ちゃん。

そんな唯ちゃんの願い事はといえば……………。

“ムギちゃんの美味しいお菓子が、毎日食べられますように
唯”

「……これってもう、叶ってるんじゃないあ……」

「これからも美味しいお菓子よろしくね、ムギちゃん」

「了解しましたあ……」

お互いに敬礼しあってるムギちゃんと唯ちゃん。

実は私もその願い事、一時考えてたのは内緒で……。

『じゃあ、次は私ね』

「おっ！！それじゃあ海衣奈」

海衣奈ちゃんの願い事かあ……、何だろう？

“ちひろちゃんのベストショットがもっと欲しいわ

海衣奈”

「……へ？ふええええっ!？」

海衣奈ちゃんてば、何をお願いしてるのお!？

「そういう事はちひろに直接頼め」

『それもそうね。じゃあちひろちゃん、よろしくね』

「そっ、そんな恥ずかしいの、ダメですっ……」

恥ずかしがってる私を、海衣奈ちゃんはすかさず携帯に収めてた……。
早くも願い事達成されたかも……。

「それじゃあ、私も」

「おっ、憂ちゃんはどんな願い事をしたんだ？」

「私はズバリ、これです!!」

憂ちゃんがそう言い切って出した短冊を覗いてみると……。

“お姉ちゃんがいつまでも元気で楽しくいられますように” 憂

「……う、憂い……っ!!」

「……お、お姉ちゃん!? 皆が見てるよお……」

感動して憂ちゃんに抱き付いた唯ちゃん。

憂ちゃんは恥ずかしがりながらも、結構満更でもないみたい……。

「憂ちゃんは自分のお願い事しないの？」

「これが私の一番の願い事ですから……」

顔を赤らめながら答える憂ちゃん。

こんなかいがいしい妹を持って、唯ちゃんは幸せだと思っ。

取り敢えず、これで皆の願い事は全部拝む事が出来たし、これで七夕パーティーは無事終了みたい。

「ち？ひ？ろ？」

「ひゃ、ひゃいつ！！」

律ちゃんが私の顔を苦笑いしながら見つめてきた。

顔、近すぎだよ……。

「終了みたいじゃな？い？だ？ろ？何ちひろだけ逃げようとしてるんだ？」

「ふええ……、だつてえ……」

「だってもしかってもないだろ!!ちひろは何お願いしたんだ?どね、ちよつと見してみ?」

「……い、嫌だよお……」

よく考えたら、私の短冊って皆と比べたら変な事書いてるし、見られるなんて恥ずかしいよお……。

「まあ!?!なんて反抗的な事を言うんでしょ、この子は!!そんな子に育てた覚えはないザマスわよ!!」

「お前はいつからちひろの母親になったんだ!!ていつか、育てられた覚えも無いぞ!!」

私の代わりに澪ちゃんがつっこんでくれました……。

「さあ、見せなさい」

「そ、そんなあ……」

「あくまでも見せないと言っのなら……、海衣奈先生、お願いします!!」

『先生にまかせなさい』

「……………？」

海衣奈ちゃんは素早く背後に忍び寄り、私の両肩を掴んだ。

『ち？ひ？ろ？ちゃん？覚悟はいいわね？』

「はわっ、はわわわわ……………」

嫌な予感に身体が震えて逃げる事もままならない私に、海衣奈ちゃんの魔の手が襲いかかった……………。

『何処がいいのかしら？脇の下？それとも背中の中のライン？脇腹？足の裏？』

「キヤハハハッ！！お願い、海衣奈ちゃん、あふっつ、だ、だめえっ、やめてえ……………」

あの唯ちゃんの赤点騒動の時に、私の身体が敏感だとバレてからというもの、事ある毎にくすぐられるようになっていた……………。

そして次の瞬間、私は短冊をコンクリートの地面に落としてしまった……………。

「よっしゃあ！ちひろの短冊ゲットだぜ！！」

「ケモンか！？」

「どれどれえ？」

「……ら、らめええええ……っ……」

抵抗空しく、皆の目に晒される事となった私の短冊……。

皆が覗いた瞬間、時が止まって目が点になっていたのが分かった……。

「……なあ、ちひろ？これって願い事じゃないじゃん？」

律ちゃんの言う通り、私が書いたのは願い事じゃない……。

「……確かにそうだけど、一年に一度の事だからと思って……」

「まあ、ちひろらしいと言えばちひろらしいな……」

律ちゃんもなんとか賛同してくれた……。

「いいんじゃないか？こつこつのもありだと思っ」

漣ちゃんも……。

「私も漣ちゃんと同じよ。素敵だわ、こつこつ」

ムギちゃんも……。

「なんだかちいちゃんが眩しい……。全然欲が無くって……」

唯ちゃんも……。

「お姉ちゃんのは欲丸出しだもんね……。ちひろさん、きつとこの気持ち、伝わってますよ」

憂ちゃんも……。

『そうね。ついでだから、この気持ちを声にして伝えてみたらどうかしら？』

「えええええっ！？」

海衣奈ちゃんが突然、突拍子も無い事を言い始めた……。

「お、いいなそれ！ちひろ、善は急げだ、いくぞ」

律ちゃんは私の背中を押して、皆から一步離れた所に追いやった…。

「『頑張れ』」

「ふえええ……」

もうこうなったら、やるしかないみたい……。

私は深呼吸をして、短冊に書いた事を声を大にして、気持ちを込めて叫んだ。

「お母さあーん、お祖母ちゃーん、……私は皆と楽しくやってまーす！だから心配しないでねえーっ！！」

一年に一度しかない、想い人との出会い。

お母さんやお祖母ちゃんに、今の気持ちを伝えたかった……。

「『私達がついているから、どうか安心して下さい』」

「」

私の周りに皆が集まって、嬉しい言葉を八もらせてくれた……。

なんだかもう、胸一杯……。

「ちいちゃん、泣いてる!?!」

一斉に6枚のハンカチが出されて、私の涙を拭い始めた……。

「ああっ!?!皆、上、上っ!?!」

「「「「「上っ?」「「「「「」

唯ちゃんの言葉に、一斉に顔を上に向けた。

「「「「「わあっ!?!」「「「「「」

あのどんよりとした雲がいつの間にか消え去って、空には綺麗な天の川が横たわり、数多の星が彩りを添えてる……。

皆、その幻想的な光景に感動して言葉も無かった……。

上を向いたせいか、涙もいつの間にか止まっていた……。

『もしかしたら、ちひろちゃんの想いがお母さん達に届いたのかも

ね

「……………そう、なのかなあ？」

「一年に一度の特別な日だもん。ちいちゃんのお母さんやお祖母ちゃんが出来に来てくれたんだよ」

「粹な事するなあ、ちひろのお母さん」

「へえ、律もたまにはメルヘンティックな事言っただな？」

「……………よ、よせやい！……って言うか、おデコ撫でるなあ！……！」

澪ちゃん、唯ちゃん、海衣奈ちゃんは一斉に律ちゃんのおデコを手で撫で回した……………。

なんだか気持ち良さそう……………。

この星空って単なる偶然なのかなあ？

それとも、お母さん達が起こしてくれた奇跡？

真実はどっちか分からないけれど、素敵な七夕になったのは間違いないみたい。

「……………ところで、ちひろちゃんのお願いは何かしら？」

「え？私のお願い？」「私も聞きたいです。ちひろさんのお願い事」
ムギちゃんと憂ちゃんはまだ聞いていない私のお願い事に興味津津の様子。

「……ん、私のお願い事は……、………なのっ………」

二人にだけ耳打ちをして、私のお願い事を密かに伝えた。

「ちひろちゃんはもっと欲を持ってもいいと思う。でも大丈夫よ、その願い事はちゃんと叶うわ」

「そうですね。私達がいる限り、絶対大丈夫ですから」

「………ありがとう………」

皆がいれば、この細やかな願いはきつと叶う。

私一人じゃ絶対に叶える事は不可能なもの……。

「それじゃあ皆さん、家の中に入ってください。御馳走を用意しますのです」

憂ちゃんの手料理が食べられると聞いただけで、皆のテンションが

上がる。

「憂の料理が食べられるだけで、幸せ幸せ〜っ」

『憂ちゃんの願い事、もう叶ったわね?』

「そうですね」

憂ちゃん、とっても嬉しそう。

その愛くるしい笑顔は、私も釣られて笑ってしまう魅力を持ってる。

「私、ケーキを持ってきたの。後で一緒に食べましょう」

「おおっ、さすがムギ。用意がいいな」

「唯の願いも叶ったみたいだな」

「エへへ……」

唯ちゃんの屈託の無い笑顔に律ちゃん、澪ちゃんもやっぱり笑ってる。

「行こっ、ちひろちゃん」

「ちひろさん、早く早く」

ムギちゃんと憂ちゃんに手を引つ張られ、私は皆と家の中に入った。

）
）

憂ちゃんの手料理を囲んで、皆の幸せそうな笑顔が溢れてる。

私の願い事は、これからも叶い続けると確信してる。

まったく根拠は無いけど……。

ムギちゃんと憂ちゃんに連れられて家の中に入る前、こっそりと括り付けた短冊は今頃、涼しさを呼び寄せる風にたなびいていると思う……。

“皆の笑顔の輪の中に、いつまでも一緒に居られますように
ちひろ”

(後書き)

如何でしたでしょうか？

初の短編小説でしたので、うまく書けたかどうか正直不安でした…。

皆さんは七夕の夜、どう過ごされますか？

自分は……、仕事です!!

ちなみに自分の願い事は、「自分の小説で、一人でも多くの人を楽しめますように」ですね。

皆さんの願い事は何ですか？

本編も暇を見て少しずつ執筆してますので、もう少しお待ち下さい。

それではまた、お会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6758u/>

想い、届いて.....。

2011年7月14日14時53分発行